

図書館と真夏の仙人

江戸幕府は、江戸城内に將軍のための書庫を持つていて、そこに詰める役目も設けていたという。要するに、江戸の昔から書籍を蒐集、保存する場所があったということだ。虫食いや火事などで散佚してしまふこともあっただろうが、書物を集め、それを所持し続ける努力を怠らない姿勢はそれこそ非難の対象にならない。知の遺産は継承されていくのが望ましい、だから、江戸の時代を終え、明治、大正から昭和の動乱を迎えても形やらを変えつつ現在まで存在している図書館は、これからも利用されつつ、残されるべき施設なのである。

というか、涼しいし、静かだ。

「……」

黒子は、提出するレポートの参考にする本たちとは別に、古めかしく置いてある一冊のノートの表紙を覗んでいる。

大学の前期試験は殆ど記述方式のテストで、レポート提出の教科はさほどない、学部生の一年ボーズが書いた作文に毛の生えたようなレポートなど読む時間すら勿体ないと教授先生方は考えておられるやも知れず、詰め込みにはほどほどと苦労したが、残りは二つ、まあなんとかゴールが見えていた。尤も黒子の履修した講義がそうだっただけで、レポートに次ぐレポートで泣きを見ている者もいるのだらう、何しろ理系は研究室棟から出てこない。星を見に山を連れ回してくれた

天文サークルの友人がそうだった。

『哲学史』に『教育心理学』？ 奥が深いな」

「…あ」

「テストで残しているのは数学だったね？ 統計学には必要だから」

ひよいと本の表紙を覗いたと思うと小声で話しながら黒子の隣に座り、古びたノートにびたりと目を止める。全体の黄ばみといい、もはや手触りさえ違うそれは古いを超えていると見れば分かる、彼も無視できないのは当然のことだ。

「これはなんだい？」

ノートだというのは見れば分かる、だから賢明な彼の問い掛けはこの中身はどういったことが描かれ、どうした経緯いきまつで黒子の前にあるのかということに決まっている。

「日記です」

我ながら短く素っ気ない。ノートを封筒に入れてから手早く本を揃え、携帯電話や筆記具などを片付けた。

「出ましよう、赤司君」

約束の時間まで一時間以上はあつたはずだ、黒子は壁際の掛け時計を見上げる。やはり腕時計も狂つてはいない、どうして早く来てしまふかなこの人。というか、彼は待たせるタイプの人間のはずなのだけど、どうも黒子とでは時間前に現れる。

大学図書館の入り口はカウンターの前にある回転式のバーである、ぐるっと回って利用者をカウントする仕組みで、赤司はカウンターの

司書に軽く会釈してから黒子の後をついてきた。

「うるさかったか？」

「いいえ」

首を横に振る。

「キミの学校に比べたら小さいですし…」

区図書館くらいで広くもない。だから、彼がいると目立つ。広さだとかを競う意味なんてないことは承知しているのになんとなく悔しかった。

「黒子」

校門まで足早になるところへ赤司は腕を引いて止める。

「そのノートの話を聞きたい」

「え」

「オレがそれを見ってしまったから黒子はぎこちなくなった。知られたいくないものだったんだらう？　しかし黒子はそのノートを持って余しているのは確かだ」

「…っ…」詰まる。

今度は頷くことも出来なくなった。この人は鋭い。僅かの間、視覚の情報だけで黒子がきつと自身でも自覚していない心の裡を読んだのだ。早く着いたから、待つのもどかしいとか、黒子はこのような本に囲まれてテスト勉強をしているのか、とか言われたくない、というところまで行き着いていてくれないのは有り難いけど。

「その…」

自分が注目されることも日光を浴びるかのように自然に受け止め

て、特に異性が乗せてくる意味には気付こうとしない。

「あ」

相手は慌てたように手を離す、驚かせるつもりもなかったし、ただ、気になって、と言う。本人は微笑を浮かべたかったのだろうけれど表情は柔和でもなく、少々の緊張が張り付いていた。

「黒子が言いたくなければいいんだ」

「……」

黙って赤司を見る。珍しく相手は視線に怯むような素振りを見せる。

「…逃げたりなんてしないと判っている。でも、あの日以来まともに会うのは初めてだから、…済まない、その、オレが落ち着かないだけだ」

確かに赤司は黒子の知っているいつだって落ち着き払っている赤司ではないようだ。つまり冷静ではない。でもって、そういうのを隠せないのか。

「巧妙に押し隠すくらいへっちゃらかと思ってきました」

「黒子」

氣遣いのない発言だった、黒子はすぐに謝る。どっこい、相手は気を悪くするどころか寧ろ同意だとばかりに胸を張る。

「いや、オレも図書館でお前を見付けるまでそう思っていた」

「そうですか」ですよね。

「本当に、黒子といると自分がアップデートされていくみたいになる」

「…薫さんが、一度アップデートするとダウングレードするのは大変だって言ってましたよ」

それは気を付けないとな、と赤司はそうするつもりもないみたい

言ってこちらを見る。黒子とひと月ぶりに会ってやっと浮かべる緩んだ顔だった。

黒子の腕を離してから手の微かな震えを感じた。腕の筋肉はこれまでになく緊張し、不自然なくらいの力が入っていたのだろう、情けないと思う一方で可笑しくもあつた。

「赤司君が奇妙に感じたのは正しいです。このノートは祖母に渡されたいです、日誌ではない、『日記』です」

木陰の遊歩道を歩く、蟬が頭上で囀しいほどに鳴いており、すれ違ふ人も殆どない。ペットの散歩やランニングコースにされるのだからこの時間帯では当たり前である、暑すぎる。梅雨明け早々から炎天が続く、息苦しいほどの暑さにはなっているがどこからともなく吹く風が涼を運んでくる、救いはそれくらいだった。学生とて夏休み直前だ、大学に部活やサークルで向かうらしき何人かとすれ違ってくるので、赤司と黒子は阿呆の一組である。

「歩かせてすみません、バスもないんですよ、この時間」

「いや。オレが早く着きすぎってしまったものだから」

ついでに立ち寄ろうとしていたカフェテリアも夏季休業で閉まっていた。どこでも構わないと赤司は言ったが、黒子はコンビニでアイスコーヒを二つ買っただけだった。

「祖母が持っていたから、ボクの親戚筋の誰かが書いたものであると

は思います」

「うん」

「そして日付は大正です、おばあ：祖母は昭和の生まれです」

つまり、その祖母刀自のさらに上の世代の黒子家に縁のある誰かということになる。

「中身を読んだのかい？」

「はい」

黒子はこくりと頷いてからストローを啜った。彼には苦いだろうコーヒをだ。

「大正十四年、その人は中学生でした」

戦前の中学生というと、旧制中学だろうか、ノートに日記を書いて残せるほどには文化的素養もあつたと考えられる。赤司の不確かな知識ではその二年前に関東を襲った未曾有の大地震、社会は特権階級の者達で組閣され、日露と日中戦争の間の、時代が軍の色に滲みかけていた頃である。その頃の学生に比べると日陰の遊歩道をコーヒを啜りながら歩いている現代の学生とではかけ離れすぎているところではないだろう。いずれにせよ、書き物を苦にしていなかった子が孫たる黒子テツヤに受け継がれているのは確かである。

「学校のことや家のことが書いてありました。当たり前前普通の日記なんです、知らない名前ばかり出てきてちよつと気が引けたりもしたんですが……」

日記とは予定でも何でもプライベートなことを記すものだ、それを敬愛する作家に送って作品に昇華させてしまうという強者もいたが、

見る方が他人の内面を盗み読むような気がしてしまうというのはよく分かる。会ったこともない親戚は黒子にとつては他人そのものらしい。

無言で促すと黒子は鞆を指差し、

「祖母が渡してくれたのはこれともう一冊で、それも同じ人が書いた日記なんです、途中で途切れてしまっているんです」

と、ストローを回す。氷はどんどん液化してゆき、プラスチック製のカップから雫が落ちる。

「飛んで昭和十年です。その人が長野に行ったのは分かるのですが、———そこまで」

中学を卒業したとして、高校、あるいは大学というコースが考えられるが旧制の教育課程の中に生きたその日記の人物の地図はどう描かれるのかはわからない。

「その二冊？」

「はい」

風が吹いて、袖が揺れる。俯いた襟足の部分につうと汗の珠が流れる。

「……」

邪な感情を抱かせてしまふ、露出の多い季節はいろいろと目の毒である。赤司は頭を振って雑念を払う、そうじゃない。待ち合わせの目的はテスト勉強であったが、それでもない。

「黒子はどうしてお祖母様がこの二冊を渡したのか不思議に思っていて、悩んでいる」

「渡されたのは気紛れかもしれませんが、少なくとも数学やレポ―

トより気になります」

「逃避かな？」

相手は少し黙ってから額の汗を拭き、

「とも言います。でも読んでしまったから」

きっぱりとそこは潔い。気付いたから知らない振りはできない、きつとそうだろう、頭の中でスケジュール帳に×を並べながら赤司は口を開く。

「黒子」

彼は、赤司に『君には関係ありません』とは言わなかった。話が聞きたいと頼んで相手がにべもなく断れば赤司も引く、それは彼が赤司に寄せる信頼であつて、領域への進入を許しているということだ。でなければ暑い盛りに二人でこんなところを歩いてなんていない。

「もし都合が悪くなければ、これからお祖母様のところへご挨拶に伺いたいんだが……」

「は？」

黒子は足を止める。

「今から？」

「ああ」

赤司は真摯に頷いてみせた。それはそれでひと月前に感じたものより大きく心臓を締め上げてくれるけれど、黒子の方はその発想の飛躍が分からないという風にきよんとしている。

「オレにも見せて欲しいとお願いしたいから」

「…日記を、ですか？」